



風景構成法に表れる心理的变化 : 二事例の語りについての検討

久保 薫, 悦子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 8(2):15-23

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81008821>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008821>



風景構成法に表れる心理的变化

—二事例の語りについての検討—

The Study of Psychological Change in the Landscape Montage Technique -Examination about artist's narrative in the two cases-

久保 蘭 悦子*

Etsuko KUBOZONO*

要約：本研究は2年の間隔を経て2度の風景構成法を実施し、作品の変化から描き手の心理的变化を探るという目的で、2名の調査協力者を対象に描画とインタビュー調査を行った。同時に本研究では描かれた風景に「物語（ストーリー）」を作ってもらおうというプロセスを導入し、「物語」によって言語的に表現された描き手の心の動きやそのはたらきについても検討することを目的とした。結果、風景構成法の構成やアイテム自体の描かれ方のわずかな変化、表現の仕方からだけではなく、物語内容の変化からも、描き手自身の心理的な変化についてのさまざまな示唆が得られた。とくに物語は、描き手自身が作品を眺めることで自己の内面へと向かい、自分自身についての気づきを得る契機になり、さらに見守り手にとっても描き手の内的世界への理解をより深め、見守り手と描き手、描画の三者を結ぶ重要な橋渡し役を担ってくれることがわかった。風景構成法の変化を眺めることは、臨床群のこころの理解のみならず、臨床群でない者にとっても心理的变化・成長を理解する契機となる。描き手のこころの変化や心理的成長に、描くこと・語ることを通じた一連の風景構成法体験がどのように働き、生かされるのか、今後の研究が期待される。

1. 問題と目的

風景構成法 (Landscape Montage Technique; 以下 LMT と表記) は1969年に中井久夫によって考案された芸術療法の一技法である。現在では病者に対する箱庭療法の導入テストという意味合いだけではなく、治療技法のひとつとして、または投影法のひとつとして幅広い心理臨床の現場で使用され発展している。これまでにさまざまな基礎研究や数量的研究、事例研究が積み重ねられており、病的指標や構成を発達の段階として捉える構成段階などが発表されている。岸本 (2013) は「描かれた風景に分析を施して病態を明らかにするといったテスト的な側面もあるが、描かれるプロセスや描かれた風景をともに味わうことで治療的な作用をもたらすことに真骨頂がある」と述べており、とくに現在ではクライアントとセラピスト、描き手と見守り手との相互作用によって展開する LMT の「ストーリー性」に注目が集まっている。

高橋 (2007) は、「表現されたものを検査者が正しく理解するとともに、クライアント自身が自己の内面を洞察できるように、非言語的に表現されたものを、言語により意識化することが必要となる。クライアントが描画に表出した内容を、言葉で表現するためには、検査者がクライアントに共感しながら、描画をともに

味わいつつ、クライアントが表現し、伝えようとする事柄を汲み取っていく対話が大切である」と述べている。高橋はこの描画後の対話を PDD (Post Drawing Dialogue) とし、「クライアントが描画を通して表現し、伝えたいことがどのようなものであるかを適切に理解することができ」るものであり、さらに「それだけではなく、描画中にはクライアント自身も気づかなかったものが、描かれたものを検査者とともに眺め話し合うことにより洞察できることが多く、描画に表現された非言語的な心の動きが、言語化され、意識化される過程でもある」と述べている。このように描画後の対話を通じて描き手の風景構成法体験を探るという立場からの研究の必要性も論じられている。

また渡部 (2005) は女子学生を対象に、継続面接で実施した複数の LMT 作品における描画変化特徴について検討を行っている。結果、青年期にある比較的健康な来談者では、初描画から構成が安定している場合が多く、2回目の描画においては安定した構成は変化せず、人物の移動・視点の移動・小項目の変化が行われることが多かった。一方、心身症状のある描画者は、大景の構成の一端を担う「川の角度」を変化させていた。また、臨床経験の長い第三者による評定の結果、構成変化が少ない2枚の描画においても、人物や全体の印象などのわずかな変化を通して描画者の変

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(2014年9月30日 受付)
(2014年11月27日 受理)

化が読み取られることが分かった。臨床現場では継続面接の中でLMTを複数回実施しその変化をクライアント自身の変化として捉え治療に生かされる機会が多いが、このように縦断的研究として報告されたものは少ない。しかし渡部の研究も継続面接の中での実施ということもあり、面接の実施回数や2枚のLMTの実施間隔に個人差があり、中には1カ月という狭い間隔で実施されたものも含まれている。

本研究では大学生を対象とし、2年の間隔をおいてLMTを実施し、2枚の風景構成法作品をともに眺めながらその変化についてや描き手のLMT体験についてインタビュー調査を行う。大学生の2年間という刺激に溢れた時間を経て、青年期から成人期への心理的成長がLMT上にどのような形で表現されるのか、また描き手は自分自身の変化をどのように捉えるのか、描き手とともに「語る」ことで理解を深めることを目的とする。

また、本研究ではLMTの彩色・PDI過程の後に、「この風景にお話をつけるとしたら、どんなお話を作りますか。自由に物語（ストーリー）を作成してください」という教示を行い、物語を作成してもらうというプロセスを導入する。これはLMTの実施手順に本来はないものであり、非言語で描かれた描画を言語になおして解釈しようとすることは批判も多い。河合（2000）は「イメージを解釈することが自我の関与を意味し、イメージの言語化が治療プロセスの停滞につながる」とイメージの言語化のデメリットを指摘している。しかし同時に河合（2000）は「イメージに関して言語化を行うとき、動きを止める『答え』を与えるのではなく、新たな動きを生ぜしめる『問い』を発する」というイメージの特徴についても述べている。つまりイメージを言語化するということは、それを固定化するという働きと同時に、新たな動きを生み出すという働きも持っているのである。よって描画後にさらに物語を作ってもらうことは、描いたイメージに意味付けを行うという意味と、さらなる動きを生み出すという意味の両方が含まれていると考えられる。このような観点から、作成された物語にことばとして表れる描き手の心の動きについても考察していく。

2. 方法

【調査時期】X年11月、X+2年11月

【調査対象者】A氏：女性。X年時22歳（大学4年生）、X+2年時24歳（会社員） B氏：男性。X年時21歳（大学3年生）、X+2年時23歳（大学院1年生）

【施行法と手続き】

1. 風景構成法

個別法。皆藤（1994）に倣い「今から、風景を描いてもらいます。ただし私の言う順に描いてください。ひとつ描き終わったらその次に描いてほしいものを言います。全部で10項目言います。10項目描くとちょうどひとつの風景になるようにできています。ですから私の言う順に従って一つの風景を作ってください。」と教示を行い、「川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石、最後に付け加えたいもの」と順番に教示した。枠づけは検査者が行った。

2. 彩色（X+2年時のみ）

X年時は時間の都合上彩色できなかった。

3. 風景構成法作品質問紙（PDI）

皆藤（1994）を参考に「描いた季節」「時刻」「人物」「風景の中の自己像」等についての10項目について質問紙に自由記述してもらった。

4. 物語（ストーリー）作成

質問紙に引き続き、「この風景にお話をつけるとしたら、どんなお話を作りますか。自由に物語（ストーリー）を作成してください」という質問を設け自由記述で回答してもらった。

5. 質問紙

描き手の心理的健康度を客観的に測定する目的で①ベック抑うつ尺度（林ら（1991）による日本語版。全21項目）、②自己肯定意識尺度（平石（1990）による。全41項目）、③ベック絶望感尺度（田中ら（1997）による。全20項目）を実施した。

なお先行研究におけるそれぞれの尺度の青年期を対象とした平均値は、①ベック抑うつ尺度は大学生男子で9.47点（SD=6.71）、大学生女子で11.83点（SD=7.47）（林ら（1991））、②自己肯定意識尺度が141.68点（SD=21.88）（筆者の先行研究（2009）による）、③ベック絶望感尺度が6.3点（SD=3.6）（田中ら（1997））である。

6. インタビュー調査（X+2年時のみ）

描画の約一週間後にインタビュー調査を実施した。2つの作品をともに眺めながら、半構造化面接を行った。インタビューの流れと質問項目をTable1に示す。

Table1 インタビューの流れと質問項目

教示 今から、先週描いていただいた絵と2年前に描いていただいた絵について質問をします。思い出したことや思い浮かんだことがあれば遠慮なくお話ししてください。

Table1 インタビューの流れと質問項目

教示	今から、先週描いていただいた絵と2年前に描いていただいた絵について質問をします。思い出したことや思い浮かんだことがあれば遠慮なくお話ししてください。
①	※ 今回（X+2年）の作品を見せてこれは先週描いてもらった絵ですが、今見てどう思いますか？
②	描いているときのことを覚えていますか？描いているときは、入りこんでいる感じでしたか？それとも客観的に、外から見て考えながら描いている感じでしたか？
③	描いているときに何か思い浮かべる風景像はありましたか？
④	※ さらにX年の作品を見せてこれは2年前に描いていただいた作品ですが、覚えていますか？これを見て、今どう思われますか？
⑤	このときお話を作ってもらったんですが、覚えていますか？読み上げてもいいですか？（検査者が読み上げる）今聞いて、どのように思われますか？
⑥	二つの作品を比較して、どういう風に感じますか？
⑦	変わっているところはどこだと思いますか？その変化とは何なのでしょう？
⑧	作ったストーリーを比較してみて、どう思いますか？
⑨	自然と思いだされることやエピソードなどはありますか？
⑩	どちらの作品があなたらしい、あなたに近いと感じますか？それはどのくらいの距離感でしょうか？
⑪	個別質問（事前に用意したもの3つほど）

3. 結果と考察

結果については、調査協力者のプライバシーに配慮し一部を修正した上でできるだけ生の声を記述するよう努めた。

事例1：A氏のケース

1. プロフィール

A氏は女性、X年時は22歳、大学4回生であり、X+2年時は24歳、会社員であった。

2. 尺度について

X年時は自己肯定意識得点が180点と群を抜いて高かったものの、X+2年時は139点になっている。絶望感得点はX年時3点、X+2年時6点、抑うつ得点はX年時9点、X+2年時2点といずれも低い。

3. 描かれた風景構成法

図1にX年時の、図2にX+2年時の風景構成法を示す。

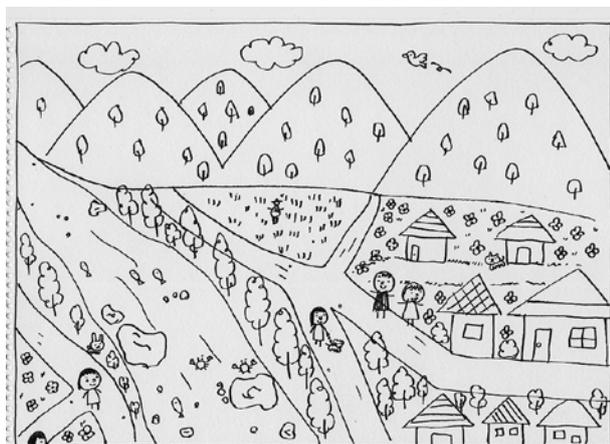


図1 X年時のA氏の風景構成法

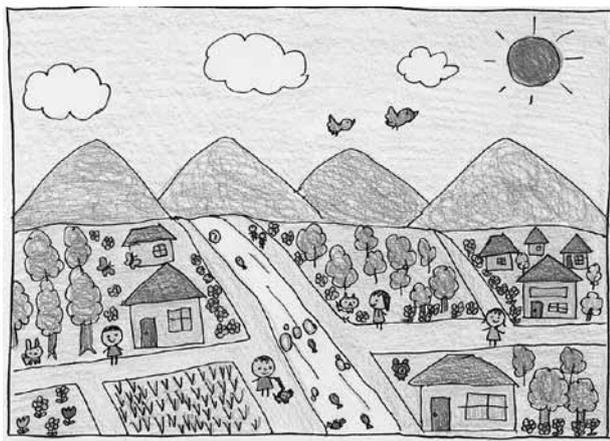


図2 X+2年時のA氏の風景構成法

4. 物語（ストーリー）

【X年時の物語（ストーリー）】

むかしむかし、この町は、川にゴミがあふれ、木も切られ、荒れた町になっていました。しかし、「このままじゃ人も住めなくなるし、住んでいる人も逃げていってしまう！」と当時の町長が言いだし、町民にゴミ捨てのマナーや、木を切り倒しにやってくる都会の大会社を説得しました。なかなか町長の説得は聞いてもら

えませんでした。ある日川の廃棄物が原因で公害が起きてしまいました。それがきっかけで、町長の声はやっと皆に届き、みんなもきれいな町づくりに励むことになりました。おかげでこの町はとてきれいな町になり、みんなが住みやすく、ゆったりできる町として有名になったそうです。

でも町長は公害がなかったら皆話を聞いてくれなかったんだろうと思うとすこしさみしくなったとき。おわり。

【X+2年時の物語（ストーリー）】

この町では、昔から動物も人間もみんな仲よし。みんなで助け合いながら生活を共にしてきました。そんな町にある1匹のネコがやってきました。名前もないそのネコは、他人の家に入っはご飯を食い逃げし、みんなで作った花だんも荒らし、いたずらばかりして、皆を困らせていました。そのうちネコはみんなから嫌われ、ひとりぼっち・・・そんなある日、となりまちから越してきた女の子がネコに話しかけてきました。「なんでいつも一人での？一緒にあそぼう！！」毎日毎日女の子は一人ぼっちのネコに話しかけてくれました。はじめはネコもうっとおしがっていましたが、「一回だけあそんでやるか」と思って一緒にあそんでみると、楽しくてたのしくてしかたありません。そのうちネコにも友だちがたくさんできていつも感じていたさみしい思いもいつの間にか感じなくなりました。今ではいたずらもしなくなり、女の子と仲良く暮らしました。おわり！！

5. インタビュー内容

A氏の発言についてはプライバシーに配慮し本質を損なわない形で一部改変し、インタビューの全内容から一部抜粋したものを記載する。〈〉内は調査者の言葉。

①X+2年時の絵を見ての感想

我ながらいい出来具合。色づかいいよかったし、何よりいっぱい感。紙を埋め尽くして使いきった！っていう感じ。

②描いているときのこと

動物とか人間とか植物とか、そういったのをバランスよく配置して描いているときが一番楽しい。

③思い浮かべる風景は

うーん・・・これって順番に描いていくやん？次何くるかわからんよな？実際こんな風景あんまりないし、たぶん思い浮かべて言うよりバランスよく、いかに埋めるかを考えていた。色塗りも。

④X年の絵を見て

似てるようで似てないな。〈今見てどう？〉雑やな。今回も前回と同じような感じで描いてると思ってたけど、改めてみたら微妙に違う・・・大胆な気がしますね。一個一個のものの大きさとか。結構今回も前のこと思い出してて、こんな感じで描いたなって思いだして描いたんだけど。

⑤X年時のストーリーは

川が決壊してどうこうっていう感じだった気がする。〈読みますね〉恥ずかしいなあ！（調査者が読み上げる）ひどい話やな。悲しいやんか！苦し紛れに書いた覚えだけがある。どうしよう？

絵描いたのはいいけど・・・って<絵のメルヘンな感じからこのストーリーは>たぶんそのときって就職前やから、自分で毎日社会がどうなってるか、ニュース読んだり勉強とかしてたから社会派なストーリーになったんじゃないかと思う。

⑥ 2つを比較して

今回は社会派からは変わったな。ほんわかしてる。<作るときすごく悩んでたけど>悩んだ。町がどうこうなったりとか、川が決壊したって話にしようかなって一瞬思ってたけど、なんでか・・・ネコのむすっとした表情に、こいつでいこうかなと思って。ストーリーが浮かんできた。

⑦ 変わったところは

基本的には変わってないかな。

⑧ ストーリーを比較してみる

<ネコや女の子は>別に誰とか考えて描いてない。難しいな。<カップルは>遠くの方に人書こうと思ってさ。さみしいかなって思って。一人でぼつんで遠くはさみしいかなって。<この話ってどういうことだろう？>これ（風景の中の自己像として示した黄色い服の人物）が自分だとしたら、この人自分の周りを客観的に見てるわけやん。目線からして。客観的に見てるって点で女の子（物語の主役の女の子）が妹かなって思って。そのストーリーも自由な感じの子。周りの子が嫌われてるけど気にせず話しかけるみたいな。別に妹と似てるわけじゃないんやけど。そんな自由な感じが妹かなって。でも、今深く考えていくと、どっちも自分にある面な気もしてきて。ネコは・・・素直になられへんときってあるやん。周り、たとえば親とかが心配してくれたとしても、いい、いいって引きこもっちゃうところもあるし。でも、この子みたいに、周りの評価とか気にせずにならって人と接するところとかもある気もしてきた。<自分が？>そう。<こっち（X年時）の話は？>就職決まった後だったから、こんときはほんまに目標もかなって、これからそれでやっていくんやってすごい思ってた時期やって、自分でも勉強したりしてたし、そういう日々の行動とか意識が出たんじゃないだろうか？

⑩ 個別質問

<川について>前は川失敗したなってのはすごい覚えてて。もっと今回と同じ風に描いたと思ってたんやけど。こんな端っこでビヤッって流してるとは思わなかった。どっから流れてきてるか不明だしな。<川の流れや山の険しさが穏やかになったように思う>2年前はほんまに仕事がんばろうと思ってたし、やっぱ仕事の目標とか、自分の夢とか、すごい難しくて高いもののような気がしてた。だから必死に勉強してたし、やらなやらなって思ってたところはあった。今は山も川も穏やかになって（笑）仕事って意味ではとくにやけど、やっぱ現実を見て落ち着いたんやろうなと思う。この2年間で。前のやつは空も窮屈やん。そんなくらいぎゅうぎゅう詰めであったけど、今は上の方余裕あるし、鳥もじゅうぶん2匹くらい飛んでるしな。前の鳥急いでるしな（笑）今思えば、こいつ（黄色い女の子）を自分にしたのも、今も岐路にいるんだと思うねん。2年前に描いたときは、それに集中しとって客観的に見れてなかった気がするねん。何でこいつにしたかって、自分の中で街を客観的に見てる感じがしたんや。そこが今の自分に当

てはまるというか、そうありたいなと思ってるんかも。<客観的に？>そう。客観的にものごとをみて、自分を管理していけるように。いろんなことを処理していけるようになりたいし、そうであってほしいから。

6. 考察

A氏の2つの作品を眺めたとき、共通して言えるのはその“にぎやかさ”だろう。山にも道ばたにも木や花がたくさんあり、明るい印象を与えている。たくさんいる動物や人がそれぞれ動きを感じさせる。画面いっぱいアイテムが描かれていて、「風景構成法で描かれた描画には、描き手の何らかの心的な状態や性質が反映されている」（佐々木、2012）ことから、A氏の内的世界は基本的には充実しているといえよう。基本的に構成やアイテムの描き方は変化しておらず「A氏らしさ」がうかがえる。しかし2枚を並べて比較すると、前回と比べ今回は全体的に落ち着いた印象である。

最も目をひく変化は「川」ではないだろうか。初回の川はどこからともなく湧き上がり、いびつにうねり、大きな岩をも流している。道との間に木を配置してその氾濫から人々を守っているようにも感じられる。それに比べ今回の作品の川は細く穏やかになった。画用紙の真ん中に川が置かれ、川に沿うように道が置かれ、その道の上で人々が散歩を楽しんでいるという様子からは、あふれ出しそうなエネルギーが収まり、自分自身の中でまとまりをもって位置づけられるようになったという印象を持つ。また、A氏の作品はどちらも道の分岐が多いのが特徴的だが、初回の分岐はやや複雑で整理されていない印象である。しかし今回の作品では整然と分岐し、方向性をもって描かれている。さらに川の中の石によって川で分断された二つの世界が繋がっているのも興味深い点である。皆藤（1994）をはじめとする風景構成法の事例報告では、自我の成長の表れとして無意識を象徴する川が風景の中に統合されること、川と意識の象徴である道との交わり方に注目されることが多い。A氏の描画を見ても、2年間の変化としてA氏の内面の安定と統合が感じられるだろう。

A氏はX年時は大学4年生で卒業を間近に控え、卒業後は第一希望の会社に就職する予定であった。ずっと夢見て目指していた難関の職種に採用が決まり、「意欲に燃えていた」とインタビューでも語られている。自己肯定感が群を抜いて高かったのもそのためであったように思う。しかし就職後、激務から心身の調子を崩し、1年余りで退職することになってしまった。その後前職とはまったく分野の違う現在の会社に再就職したという経緯がある。A氏にとっては人生における大きな“事件”があった2年間で、2年前と現在を比較するのはとりわけ意味深いことであっただろう。前回は田が絵の中心に位置し立派なかかしによって守られていて、田に向かい沿うように道を伸ばしていたのが、今回の田は「見えてはいるけど置いとこか」という位置に収まっている。Aさんの中で田に象徴される仕事や勤労への意識が中心から隅へと移動し、他の要素とバランスよく収まる程度になっていることがうかがえる。

A氏は「現実を見て落ち着いた」と語っている。前回の絵も明るく賑やかで、A氏が内的に充実していることを感じさせていた。

しかし、岩をも流す勢いの強い川が今にも溢れ出し、穏やかな街を飲み込んでしまいそうであることを、A氏はどこかで感じていたのかもしれない。この後心身のバランスを崩してしまうが、今思えばそれを予感させる絵でもある。

物語にもその特徴がよく表れている。X年時の物語の主人公は町のためにひとり奔走する町長であるが、「公害がなかったら皆話を聞いてくれなかったらと思うとすこしさみしくなったとき。」と権力がないと耳を傾けてもらえないという「孤独」がテーマになってしまっている。今回の絵も孤独な猫から始まるが、猫は女の子と出会い「いつも感じていたさみしい思いもいつの間にか感じなくなり」孤独でなくなるのである。A氏にとって「さみしさ」という感情は重要なテーマであるのだろう。さらに自ら語っているように、窮屈だった空が今回は広がった。孤独で窮屈な思いをしていたのが、他者と繋がり合い内面が統合されることで、落ち着きを取り戻し安定した状態となった。それが抜けるような広い空となり表現されるようになったのではないだろうか。

また、A氏にとって今回のストーリーにはさらに深い意味合いがあったように思う。女の子が具体的に「妹」かもしれないと連想されているが、ある意味では自分の一面かもしれないと語られる。具体的な人物と自分自身との関係の中で自分を見つめ、自分の二面性に気づき、それを受け入れる語りになっていることが興味深い。そして「今も岐路にいる」「2年前は客観的に見れてなかった」「客観的にものごとをみて、自分を管理していけるように。いろんなことを処理していけるようになりたいし、そうであってほしい」という自己分析と今後の展望に結びついている。A氏は語りの中で、風景構成法を描く過程で無意識的に自己表現していることに気づき、そこに現れた自分自身を素直に受け入れている。LMTは非臨床群においてもそのころの在り様を映し出し、さらに描画を自分自身で見つめ直して言語化することで、より深い自己理解へと結びつけることができる可能性を持っているといえよう。

事例2：B氏のケース

1. プロフィール

B氏は男性、X年時は20歳、大学3年生、X+2年時は22歳、大学院1年生であった。

2. 尺度について

自己肯定意識得点はX年時119点とやや低いが、X+2年時は125点と少し上がっている。絶望感得点はX年時11点と高かったが、X+2年時は4点まで下がっている。抑うつ得点はX年時24点、X+2年時18点とどちらも高かった。

3. 描かれた風景構成法

図1にX年時の、図2にX+2年時の風景構成法を示す。

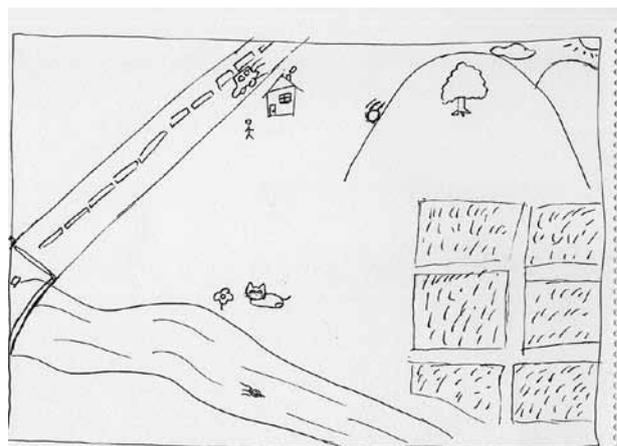


図3 B氏のX年時の風景構成法

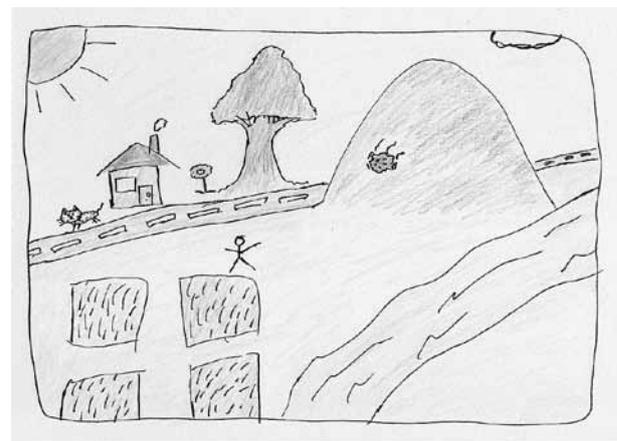


図4：X+2年時のB氏の風景構成法

4. 物語（ストーリー）

【X年時の物語（ストーリー）】

ある晴れた秋の日に、川べりで猫が一匹、お昼寝をしていました。とてもおだやかで静かな空間に、耳に入るのは川の水の音だけ。しかし、その静かな世界を、車のエンジン音と、ドアの音、そして、山から落ちてくる石の音が静けさをひきさいていきました。

【X+2年時の物語（ストーリー）】

自然の残るいなかの集落で、おじさんが稲刈りの時期を見定めています。近くを通る道路には車も通らず、山で岩がゴロけていても気にならない、そんなのんびりとしたこの村はとても平和な日々が過ぎていきます。

5. インタビュー内容

A氏の発言についてはプライバシーに配慮し本質を損なわない形で一部改変し、インタビューの全内容から一部抜粋したものを記載する。<>内は調査者の言葉。

①X+2年時の絵を見ての感想

どうですって・・・？何かありきたりな絵描いてるなって。何か「こういう絵」っていうのがあるんですよ。言われたとおりに書いて、川が右下にあるとか、太陽左上にあるって言うのを組み合わせていったって言うのが、なんか頭の中にあるんです

よ。順番は分からないので、全体像は見えてないはずなんですけど、なぜかこれはこのへんならだろうってのがあ。おとし描いた時も多分こんな配置なんです。

②描いているときは

内か外かと言われると絶対僕は外（客観的に）ですね。なんか本当に、額縁があってその中に配置している感じです。

③思い浮かべる風景は

なんかステレオタイプのものが僕の頭にあります。＜それは何の影響？＞ないと思うんですけど。全然分かんないんです。

④X年時の絵を見て

あれ？意外と違いますね。やっぱり岩転がってるんだ。描いている途中で確かに置物的な岩も思い浮かんだんですよ。でも、最初に岩って言われた瞬間は落ちてきて、そこに物語があるのかなってイメージが浮かびました。

⑤X年次のストーリーを聞いて

すごい恥ずかしいです（笑）何を思ったんだろう、このとき。たぶんこっちでも似たようなこと書いてるんですけど、静と動っていうのを必ず両方同時に描きたくなんですよ。思いつくんですよ、この図案を見てると。川って言われたときに、大きな川や氾濫している川じゃなくてせせらぎなんですよ。岩転がっているって図が出てきた瞬間に、絶対これは静けさを破壊してるものだっていう形になるんですよ。＜今回のストーリーでは、転がる岩が気にならなくなった＞何があったんでしょうね。最近わらわらと実験とか全部やらなくて。このころは副部長の頃なんで、突如として、突発的に起こることに対応していけなくちゃって緊張感があって。でも今は何かきても、ハイハイって。

⑥2つを比較して

＜ネコはどういう存在？＞見るのは好きです。野良猫とかいたらニャって言わしたり（笑）こたつの中で丸まっているのいいです。たぶん自分の性格でセカセカしてしまうので。ゆっくりしたいときがあるんですよ。ぼけーっとしたいときが。家ではぼけーっとしてますけど。＜昼寝は？＞自分は昼寝できない人なんで。昼に寝ることができない人間だったんで。陽気な場でゆっくりしたいんでしょう。自分の性格上、止まっていることはできない性格なんですけど、でも止まりたいんですよ。悪く言えばさぼりたいんですけど。でもあんまりさぼれる性格ではない。

⑩自分らしさや絵との距離感

何だろう、理想・・・？将来こんなとこに行きたいなって。＜岩が転がって？＞いやー（笑）小石で勘弁してほしいんですけど（笑）たぶん幼少期の影響もあるんでしょうけど。＜棒人間は？＞ひとつは自分で描けないっていうのがあるんですけど。ちょっとデフォルメしたいんですよ。結局僕の絵全部デフォルメじゃないですか？＜ネコはリアルな感じ＞色付けてって言われた瞬間、三毛猫を思いついたんですけど。人と言えば棒人間ってイメージ。描けないわけじゃないんですけどね。棒人間じゃなかったら“ドラえもん”になります（笑）描けないわけじゃないけど棒人間の方がじっくりくる。

⑪個別質問

＜木が印象的＞木は大きいイメージはありますね。屋久杉とか、日立の木とかそんなイメージです。木はどんな象徴なんですか？

＜この木は“支えや安定”を連想する＞安定したというか、先々考えるようになってプレづらなくなったかなあとか。就職もありますし、軽い未来も。ごく最近の来週とか再来週とかもよく考えるようになりました。それこそ自分なりにやりたいんだろうって考えるようになりました。研究はほっという、すごいしゃかりき、がむしゃらにやるってことがなくなりました。副部長のときは後先考えず、大きなイベントのときはしゃかりきになってそれ以外見てなかったです。自分の研究は研究ですけど、今は研究室の後輩もできたので、遠くから見る。バイトでも結構いろいろ信用されるようになってきたので、アドバイスとか。後輩を見てあげたりとかするようになってきたんですけど。いい意味か悪い意味かわかりませんが、一歩引けるようになった。あんまり心乱されることがなくなってきたと思います。

6. 考察

B氏の2つの風景構成法は構成が大きく変化しているが、「転がる岩」「アスファルトの道路」「スピード型の木」という特徴のあるアイテムが配置を変えて、X+2年時はよりまとまってきた印象を受ける。筆者は＜箱庭のような＞という印象を受けたが、インタビューでB氏自身も「額縁があってその中に配置している感じ」と語り、驚かされた。川、山・・・と教示されるたびに“ステレオタイプ”のアイテムが思い浮かび、それを白い画用紙の枠の中に配置していく、というのがB氏の語る風景構成法体験だという。

アイテムをひとつひとつ見ていく。川は流れの向きが変わっているものの、幅や流れの勢いは同じくらいである。山はX年時に連山であったものが、X+2年時はひとつ山になっている。田はどちらも川の下流にあり機能していることを窺わせるが、X+2年時はそこで働くおじいさんが登場し、更なるアイテム同士の繋がりを生んでいる。道はどちらもアスファルトの舗装された道路であり、X年時は橋の様なもので川と接していて、X+2年時は山の向こう側を川と平行に通っている。

家は同じような煙突屋根の家であるが、X年時は道路のそばにぼつんと建っていたのが、X+2年時はやや近景になり田んぼや木のそばに建っている。木はスピード型の大きく特徴的な木である。X年時は山の中に位置していて、根っこが見えているが、X+2年時は道路の脇に降り、根は地中に消えしっかりと根を張り、大木を支えているようである。人は同じ棒人間であるが、X年時には「家に帰ろうとする若者」であり、X+2年時は「稲刈りの時期を見定めているおじいさん」になっている。動物はどちらも「のんびりやの猫」。そして石（岩）はどちらも山の上から転がっている。

X年時の描画は本人も語っていたが、彩色されておらず真ん中の空白が目立つ。物語の内容も相まって空虚な印象を受ける。比較するとX+2年時はだいたいまとまりが感じられ、アイテム同士が意味を持って繋がっている。

大きな変化は木であろう。X年時は遠い山の上に、根っこが浮いたように描かれていて、絵全体に空虚感をもたらす要因になっている。それがX+2年時になると、地面に降り、しっかりと地に「根ざしている」木が描かれている。どっしりと太い幹の先に

枝を広げ、生き生きとした緑色が“いのち”のエネルギーを感じさせる。B氏は「屋久杉や日立の木」を連想しているが、確かにこの木はこの世界の中心であり、家や田んぼの主や、ネコや花、道路を通る人々の心のよりどころになっている・・・という連想を抱かせる。

B氏の2枚の描画で最も特徴的なのは「転がる岩」であろう。どちらにも描かれているし物語にも登場している。X年時の描画や物語を見て筆者は当時少し心配になった。その頃B氏は大学の部活動で運営の中心になってがむしゃらに頑張っていたという。ここでは語られていない部分でも何らかの内的葛藤を抱えていたかもしれない。「おだやかで静かな空間」を「車のエンジン音とドアの音」「山から落ちてくる石の音」が「ひきさいて」いるというストーリーが展開されているように、“静と動”は対立するものであり、“動”は“静”を脅かすもの、破壊するものとして捉えられていた。しかしX+2年時になるとその“静と動”が共存し始める。X年時には静けさを引き裂くもののひとつであった車はX+2年時には描かれず、さらに不在になったことがストーリーの中で意識されている。「岩」は相変わらず動きをもって描かれているが、「山で岩がゴロけていても気にならない」と、意識されつつも気にならない存在になり、「転がる岩」も含めてひとつの物語が完成している。「転がる岩」とはB氏の語りになぞらえば、「セカセカしてしまう」自分、「止まっていることができない性格」である自分といった、自分自身の側面なのではないだろうか。X年時には受け入れ難かったこういった側面を、X+2年時には受け入れることができ、それも含めて自分自身であると認めているようである。B氏はこの2年間で部活動や研究、アルバイトなどさまざまな経験を積み、“自分らしさ”について考えさせられる場面を数多く乗り越えてきたのだろう。「セカセカしてしまう」「止まっていることができない性格」である自分を認めつつ、うまく統合できるようになった様子が“平和”な物語に表れているように感じられる。

4. 総合考察

今回取り上げた2事例は、それぞれ葛藤を乗り越え落ち着きや成長といった心理的变化が垣間見られた。それはLMTが整合性のある明るく楽しい絵になったという変化ではなく、個々人なりの文脈で起こった変化である。A氏のLMT作品では川が穏やかになり、空が広くなったという描画の変化にA氏自身が気づき、当時の自分を振り返ることで心理的变化が語られた。B氏においては転がる岩の存在は変わらないものの、「物語」の中でその位置づけが変化しているのが分かる。「転がる岩」がB氏のところの中で統合され、「転がる岩」を抱えている自分を受け入れて、そういう部分も併せ持つ自分というのを肯定できるようになったのではないだろうか。

中井(1996)も「風景構成法が実際に役立つのは、経過の中に現れる変化である」と述べている。中井が指摘しているのは分裂病者の治療経過という意味合いであるが、LMTが分裂病者以外の心の理解にも有効であることを考えれば、健常者にとっても生活状況と照らし合わせてその変化を眺めることは重要な示唆を与

えてくれるものであると強調したい。中井はさらに「変化を追跡することは、絶対音感ではなく相対音感に頼ることである」と述べている。変化は描き手独自の文脈の中で生まれるものであり、変化を眺めることで、他者と比較することよりも、より描き手の“いま”のこのころの状態が掴みやすくなるのではないだろうか。

またインタビュー調査からも非常に多くの驚きと発見があり、LMTそのものや物語作成の意義、描き手と見守り手の関係性について深い見識を与えてくれた。事前に筆者は「相当構造化した面接で、こちらから解釈を入れないと、心理的なことは語ってられないだろう」と予想していたが、大きく裏切られる結果となった。X年時の作品、とくに物語と再会した瞬間、描き手はまるで2年前の自分に出会ったかのように、「あの頃の自分は～だったから・・・」と口にし始めた。LMTで描かれたもの、語られたストーリーが自己の内面の反映であることを瞬時に感じ取り、それを言語化したのである。協力者はもともと自己の内面に興味があり、このころの動きに敏感だったのかもしれないし、“心理学の実験”に協力しているのだから、絵を描かされたことが自分の心理と何らか結びついているという意識はあったかもしれない。しかし一見「ただの風景」であるLMTは描き手の内的世界の反映であり、その作品をもう一度眺めて物語を作るということは、自己を見つめ直し、このころの内にあるイメージを言葉にするという作業なのである。これら一連の風景構成法体験が描き手側のところにとってもかなり重要な体験であるということを変更して認識させられた。しかし本事例の2人はもともと自己の内面に開かれていたために深い語りになったのかもしれないし、臨床群においてはその危険性も念頭に置いて取り扱わねばならない。物語作成の臨床的有効性についても今後さらなる事例検討が期待される。

最後に「見守り手」としての役割についても言及しておきたい。描き手が描画を見返して紡ぎ出した「物語」と、インタビューにおけることばの「語り」はまったく性質の違うものである。インタビューにおいて物語について語り合ったとき、よりいっそう描き手の自己の内面への語りが深まっていき、同時に見守り手としても描き手の体験するイメージへと入り込んでいくような感覚を得た。このように、物語は描き手と見守り手の相互交流を促し、また、描き手の作品を「単なる風景」ではない「描き手の体験する世界としての風景」として眺め、体験することを可能にしてくれるものであるといえるのではないだろうか。LMTがさまざまな場面で描き手のこのころの理解に有益な手段となる上で、見守り手としての役割の重要性は看過できない。見守り手としての体験や、このころの動きについても今後さらなる研究の必要性を感じた。

5. 終わりに

今回取り上げた2事例は個々人がLMT体験をいかに受け止めるか、どのように自己の内面と向き合うのかというテーマに対して、その「語り」がいくつも重要な示唆を与えてくれたように思う。ここでいう「語り」とは、作ってもらった「物語」であり、インタビューで語られたことである。

例えばB氏の「岩って言われた瞬間は落ちてきて、そこに物語があるのかなってイメージが浮かびました」という語りは描画と

物語の関係性のヒントを感じさせる。描き手・見守り手双方にたくさん見識を与えてくれたこの物語は、絵を描いた後で無理やりひねり出したものではなく、描いている途中で既に動き出していたという。LMTに物語作成という要素を加えることについて、慎重であるべきという注意点は抑えつつ、描き手の体験や語りを捉えていくことが今後の研究の重要な手掛かりになると思われる。

反省点や今後の課題としては、まずX年時のLMTは彩色されておらず、これが2枚の描画を並べたときにかなり大きな印象の違いを与えてしまったことである。彩色は単に色合いをつけるという意味合いだけではなく、その過程が意味を持っていたり、結果的に作品や描き手・見守り手に影響を与えるということがある。A氏のケース(X+2年時、図2)では、最後まで服の色を迷っていた人物に自分自身が投影され、その人物を通じて物語や新たな気づきが動き出すということがあった。山中(2001)は彩色について、「まず彩色されたか否か、彩色という関わりがなされているかどうか、という点の重要性はもちろん前提としてある。しかしそれが彩色されたとして、そのときいかにされたか、というありようはわれわれが描画に関わろうとするときに無視できない要素の一つであると考えられる」と語っている。彩色をしなければならなかったということではなく、彩色過程という大きなチャンス逃してしまったことを残念に思う。

彩色過程や物語作成も含め、白い画用紙と出会うことから始まり、出来上がった風景を眺め語り合うということまでの一連の流れは他にない風景構成法の“ストーリー”である。岸本(2011)は風景構成法に内在するストーリー性について、「異界の扉を開くようなストーリーというよりは、日常的空間の中で水平的に展開されるストーリーである」とし、佐渡(2013)は「ストーリーというパースペクティブをもちながら、絶えず動いている作品制作過程、描き手と見守り手の体験過程、人間関係の展開なども射程に入れた研究の必要性」を説いている。今後はさらにこのような視点を取り入れながら風景構成法とは何か、描き手のこころに起きていることは何か、についてより深く迫ってきたい。

参考・引用文献

後藤 智子 1996 風景構成法におけるストーリー性の問題 山中康裕(編著) 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 pp.287-312

林 潔・瀧本 孝雄 1991 Beck Depression Inventory (1978年版)の検討とDepressionとSelf-efficacyとの関連についての一考察 白梅学園短期大学紀要 第27巻 pp.43-52

平尾 和之 2013 風景構成法に身を入れる—主観と客観を超えるイメージと身体の可能性 岸本 寛史・山 愛美(編) 臨床風景構成法 誠信書房 pp.203-222

平石 賢二 1990 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康 教育心理学研究 No.38 pp.320-329

伊集院 清一・中井 久夫 1988 風景構成法—その未来と方向性— 臨床精神医学 第17巻 第6号 pp.957-968

伊集院 清一 1989 拡大風景構成法における天象・地象表現と精神的視野 芸術療法 20巻 pp.29-45

伊集院 清一 1996 拡大風景構成法—表象機能と分裂病の表現病理, 雲の描画法, 空・星空の風景, そして地上への帰帰 山中康裕(編著) 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 pp.111-139

石原 みちる 1998 前青春期の内的体験について 京都大学教育学部紀要 第44号

岩井 寛(編著) 1981 描画による心の診断 日本文化科学社

角野 善宏 1997 風景構成法を通しての急性精神分裂病の治療過程における一考察—枠構造の治療的意義も含めて 心理臨床学研究 第15巻 第4号 pp.416-427

皆藤 章 1994 風景構成法—その基礎と実践 誠信書房

皆藤 章・川崎 克哲 2002 風景構成法の事例と展開:心理臨床の体験知 誠信書房

神園 悦子 2009 青年期の風景構成法作品に表れる人物像と自己像の読み取りについて 神戸大学発達科学部卒業論文(未刊行)

神園 悦子 2011 風景構成法における“表現”についての研究—語りと構成の観点から— 神戸大学人間発達環境学研究科修士論文(未刊行)

河合 隼雄 1984 風景構成法について 山中 康裕(編)「H・NAKAI 風景構成法」中井久夫著作集別巻 岩崎学術出版社 pp.245-259

河西 恵子・伊志嶺 美津子・千葉 智子・櫃田 紋子 1998 風景構成法における臨床的基礎研究—青年期女子と精神分裂病者の「石」に関しての一考察— 横浜女子短期大学研究紀要 第13号

岸本 寛史 2011 バウムテストと洞窟壁画 岸本 寛(編) 臨床バウム—治療的媒体としてのバウムテスト 誠信書房

岸本 寛史 2013 ストーリーとしての風景構成法 岸本 寛史・山 愛美(編) 臨床風景構成法 誠信書房 pp.3-24

久保蘭 悦子 2013 風景構成法における創造性—語りと構成の観点から— 神戸大学人間発達環境学研究科研究紀要 第7巻 第1号 pp.33-42

中井 久夫 1970 精神分裂病の精神療法における描画の使用—とくに技法の開発によって作られた知見について 芸術療法 第2巻 pp.77-90

中井 久夫 1971 描画をとおしてみた精神障害者—とくに精神分裂病者における心理的空間の構造 芸術療法 第3巻 pp.37-51

中井 久夫 1992 風景構成法 精神科理学 第7巻 第3号 pp.237-248

中井 久夫 1996 風景構成法 山中康裕(編著) 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 pp.3-26

中野 江梨子 2010 PDIの前後における風景構成法体験の変化について 作品の主観的な「感じ」に関するSD法評定の変化とインタビューから 心理臨床学研究 第28巻 第2号 pp.207-219

佐渡 忠洋 2013 風景構成法研究の概観 岸本 寛史・山 愛美(編) 臨床風景構成法 誠信書房 pp.43-61

佐々木 玲仁 2012 風景構成法のしくみ—心理臨床の実践知を

ことばにする 創元社

- 多田 和外 2013 風景構成法と時間 岸本 寛史・山 愛美
(編) 臨床風景構成法 誠信書房 pp.25-42
- 多田 昌代 1993 自我発達から見た風景構成法の分析 京都大学教育学部紀要 第42号 pp.154-165
- 多田 昌代 1996 風景構成法における個性と構成——構成段階細分類の試み 山中康裕(編著) 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 pp.265-286
- 高石 恭子 1988 風景構成法から見た前思春期の心理的特徴について 臨床心理事例研究 15 pp.242-248
- 高石 恭子 1996 風景構成法における構成型の検討——自我発達との関連から 山中康裕(編著) 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 pp.239-264
- 高橋 依子 2007 描画テストのPDIによるパーソナリティの理解 臨床描画研究, 22, pp.85-98
- 田中 江里子・坂本 真士・友田 貴子・岩田 昇・北村 俊則 1997 青年期のホープレスネスと心理社会的要因との関連 日本心理学会第61回大会発表論文集 884
- 鷺岳 覚 1999 女子学生の心理社会的発達課題と風景構成法 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 No.15 pp.86-87
- 渡部 加奈子・相馬 壽明 1997 風景構成法の基礎的研究—「構成」の視点から 茨城大学教育学部紀要
- 山 愛美 2013 風景構成法の可能性を開く 岸本 寛史・山 愛美(編) 臨床風景構成法 誠信書房 pp.43-61
- 山中 康裕 1984 「風景構成法」事始始 山中 康弘(編) H・NAKAI 風景構成法 岩崎学術出版社
- 山中 康裕 編著 1996 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社
- 山中 康裕 2001 心理検査—風景構成法の基礎 臨床心理学 第1巻 第4号 pp.533-540

付記

本論文の一部は、日本心理臨床学会第31回大会(2012年)、日本描画テスト・描画療法学会第24回大会(2014年)にて発表いたしました。

2度の研究協力の上、描画や発言を本論文に掲載することに同意してくださったA氏、B氏に深く感謝いたします。

本論文の作成にあたりご指導を賜りました伊藤俊樹准教授に深く御礼申し上げます。